
私の小説は偉大なり

石本公也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我の小説は偉大なり

【Nコード】

N9079X

【作者名】

石本公也

【あらすじ】

「部活くらい入った方がいいよ」

親や友達にそう言われて、俺は文芸部に入った。其処にいたのは、自称 天才小説家。ところがその文芸部は、同好会としてすら認められていないただの集まりだった！

其の者、明らかに異常なり（前書き）

この物語を見つけて下さって、ありがとうございます。彼らを見て、面白いと思って頂けたら幸いです。

其の者、明らかに異常なり

「部活くらい入った方がいいよ」

親や友達にこう言われた俺は、古めかしい扉の前に立って、その扉を開けた。

そして――

「なんだ君、新入部員か？」

「あーっ、ようやく授業終えたーっ！」

今日最後の授業が終わり、俺は大きく伸びをした。

「喜びすぎたっての。お前はこれから家に帰んのか？」

俺の後ろにいる男子生徒、誠人まことが声をかけて来た。授業が終わって、ガヤガヤ騒ぎ出す教室の生徒達。

「まあな。お前はこの後部活だっけ？」

俺は体を前に向けたまま誠人に問いかけた。すぐに「まあな」と言う返事が帰ってくる。

誠人は、バスケットボール部に所属している。毎日楽しく過ごせているのか、疲れただのだるいだの、色々愚痴吐いてはいるものの、それでも続けてる。

「お前も部活やってみろよ。楽しいから」

誠人は爽やかな笑顔を俺に向けて言った。

ちょうどその時、教室に先生が入って来て、ガヤガヤしていた教室が静かになる。まあみんなヒソヒソと話しているが…。

「楽しいってまあ」

俺達も声を落として喋り続けた。

「別にバスケットに誘ってるわけじゃねえよ。お前も夢中になって何かしてみろよって言ってんだよ」

誠人は俺が中学校はつまらなかったとぼやいてたからだろうか、高校で何かさせたいらしい。正直思う。オカンか。

「じゃあ検討してみるよ」

嫌な話の流れになりそうなので、俺はそう言った。

「良いトコ入れると良いな」

後ろから、そんな言葉が聞こえた。

放課後。

家について、俺はまっすぐに自分の部屋に入り込んだ。ベッドの上に乗り、ゲームを起動する。ゲームをしながら、つつい誠人との会話を思い出していた。

別に、部活をしたくない訳じゃないんだよな。そこまで忙しい訳でもないし、でも、放課後に運動してる自分は想像できん。何かに一生懸命ってのは気持ちがいいんだろうけど、そんなものは爽やか系の奴らがやってろ。

……………でも、少しくらい…

その時、ガチャリと俺の部屋のドアが開いて、母親が入って来た。

「帰ってきたんならちゃんと行ってよね。それに、ゲームばかりしてるのは勿体無いわよ。それだったら部活くらい入ったら？」

母親は扉の前でそう言って、溜息について部屋を出た。用事がないなら扉開けるなよ…。

それにしても、ゲームばかりしてるのは勿体無いかあ。でも何にもする事なんか無いし、……………部活、ねえ。

そう思った俺の前で、ゲーム画面はGAME OVERの文字を表示していた。

「部活って、今更ながらどんなのがあるんだ？」

次の日の放課後、俺は誰に言うワケでなく、ポツリと言った。だが後ろの席の誠人は聞こえてた様で、つかかって来た。

「お前部活入るのか？どこにすんだよ？」

何故か目を輝かせて聞いて来た。

「だけど運動すんのは嫌だからな。楽なのはないのかな？」

「楽なのは無いと思うけど、運動が嫌なら文化系の部活に入ればいいじゃねえか」

誠人の言葉に俺は一瞬止まった。そしてゆっくりと後ろを向き

「そうだよ。文化系の部活があったよ」

驚きの表情を隠さずに俺は言った。

「お前、部活には文化系もあるって忘れてただろ」
呆れた表情を隠さずに誠人は言った。

「誠人、文化系の部活って、どこに行けばあると思う？」

「お前つい最近説明されてただろ：旧館にあるよ」

その言葉を聞いて、俺は立ち上がった。

「サンキュー」

そう言い残して、俺は旧館に向かって駆け出した。

其の者、明らかに異常なり。 2 ページ

旧館についたは良いが、俺は何処の部屋に行けば良いのだろうか。
旧館の中を回っていると、一つの、少し古い感じの扉が目についた。
俺はその扉の前に立った。

ここも部室なのだろうか、だとしたらどんな部活をしているのだろうか。

俺は、その扉を、勢いで開いた。

その中にいたのは、長く、美しい髪を讃えた美少女だった。その美少女は、俺に気付くと

小首をかしげ、

「なんだ君、入部希望者か？」

しつかりとした声で、そう言った。

「なんだ君、入部希望者か？」

グラウンドから野球部かサッカー部の掛け声が聞こえる午後の学校。
その部室棟として使われている旧館の一室に入ると、美少女がいた。
その人は、俺を見てそう言った。

「え…いや、なんて言うか、…見学？…みたいな感じで…」

俺は取り敢えず笑顔で答える。

「見学？なら君はまだ部活に入っていないのか！」

俺の前にいた美少女が、パツと顔を輝かした。と思ったら

「君、名前は？」

いきなり名前を聞いて来た。

「？：山陰龍夜」
やまかげりゆうや

なんで俺は答えたのだろうか、小学校とかで知らない人に名前を教えてはいけませんって習ったはずなのに……まあ、ここは学校だし、大丈夫か、

「では山陰君、今日から君は文芸部の一員だ。……あつ入部届けは我が顧問に出しておくから問題ないぞ。」

いや違った。問題あった。この人今なんて言った？

「あ、あの！俺は見学に来た訳で入部するとは言っていないんだけど？」

「せっかく来た者をみすみす返すワケにはいかな」

何時の間にか俺の背後に来ていた彼女は、ドアを閉めて、鍵をかけた。って

「何してんの？」

「まあ落ち着けよ新入部員。今からこの文芸部について教えてやろう」

彼女は俺の質問を無視して机に腰掛ける。俺が状況を理解できないでし固まっていると、

「取り敢えず……座ったらどうだ？」

と言ってきた。そのまま近くの椅子に座る俺。

取り敢えず、入部するとは決めていないのに、新入部員と呼ぶのは辞めろ。

「文芸部とは、一般的に本を読んだり書いたりする部活だ」

そう説明していく彼女。窓の外は、もう暗くなりかけている。ふと、気が付いた事があったので俺は彼女に問いかけた。

「ところで……他の部員は？」

すると、彼女は驚いた様にこちらを見た。何かいけない事でも聞いてしまったのだろうか、しかし、他の部員の事を聞いただけでこんな反応するか？

俺が内心であたふたしていると、

「部員は……我と山陰君だけだ。」

彼女が静かに言った。

この学校――公立 はなやまみなみ 花山南高校は、部活動に色々とルールがある。よく生徒手帳なんかに書いてある決まりごとだが、その中に、部員と部活と言う項目がある。

部を作るとき、部として発足する前に、必ず同好会として発足しなければいけないのだが、その同好会には、必ず五人以上部員がいなければいけない。十人集まればぶに昇格出来る。だが元々部だった所が、廃れて行った場合、五人未満になったら即廃部と言う悲しいシステムも存在する。

つまり、文芸部は、文芸同好会としても発足していない、ただ部屋を持ってるだけの集まりである。

この部……いや、この集まりは、まだ同好会としても活動で来ていない。

そんな所に、俺は入部させられた。

部員は俺を含めて二人。もう一人は、ビククリしてしまう程の美少女だった。

「二人……?」

俺はつい聞き直した。どんな学校でもありそうな文芸部員がまだ入部していない。俺を含めて二人?

…入部するとは決めていないが。

「ああ、最近は漫画研究会の方が人気があるし、映画同好会に入れば、自分の作ったシナリオで映画を作ったりしているからな。地味な文芸部には、誰も入らない」

そう言っただけで悲しそうな顔をする少女。

「じゃあ、なんでお前はそっちにいかないんだ? 映画とかにして貰えるんだろ?」

「お前と呼ぶな。我は日之道灯だ」
ひのみち あかり

美少女……もとい灯は、そう言うとき机から降りた。そして部屋を暫く歩き回ったあと、大きく息を吸って灯は言った

「我が文芸部に居るのは……我が、天才小説家だからだ!」
……………えっ?

今こいつはなんと言った?

「天才小説家？」

ナルシストなのか？

「ああ、我はこの学校で才能を見せつけ、ゆくゆくは、大きな場所で小説を書くのだ！だが文芸部が活動出来なければ意味が無い。そこに山陰君が来てくれたのだ」

少し興奮気味ではなす灯。別にデビューしたいなら部から始めなくてもいいと思うのだが……この子、少し抜けてるな。

でも自分の事を天才小説家って自負してるんだよな。だったら……
「天才小説家と自負するくらいなんだから、小説は書いてんだよな？見せてみるよ」

俺は椅子から立ち上がって灯に言った。

灯は、「良いだろう」と言って部屋に一つだけある棚から、一枚の紙を取り出した。

灯が差し出した紙を受け取って、俺はそこに書いてある文字を見て

「小学生の作文か！」

かなり大きい声で叫んだ。叫ぶしか無いだろう。

だってそこに書いてある文章は、

ある所に一人の人がいました。

その人は異世界に行きました。

その人は異世界から帰ってきました。

ハッピーエンドです。

………かなり、いやほとんど、いやまさに超がつく低レベルだった。

「小学生の作文？この私の文章を読んでの感想がそれか？」

灯が不機嫌そうな目を向ける。

「この文で才能を感じれたらおかしいだろ」

「なんだと？私の物語は稚拙ちせつと言うのか？」

「どう見ても幼稚ようちだろ？なんで異世界に行ったのに異世界での事が

書かれてねえんだよ！あとなんで一人称が我^{われ}なんだ？」

「何故今そこを：我と先程から言っていただろう。あと異世界での事は思いつかなかったのだ！」

「思いつかなかったなら書くなよ！それより最後のハッピーエンドってどこ！これハッピーエンドって書くな！描写しろよ最後ぐらい！」

出会ってまだ数分のはずなのに、なんで言い合う事が出来んだろうなあ俺達。

灯は、もしかするとそのまま俺に向かってビームを発射しそうなほどに鋭い目つきで俺を睨んでいる。

「お前、我に意見するからには、小説を書けるのか？」

灯が睨んだまま俺に言ってきた。

傲慢じゃ無いが、俺は小説は書けない。だが、あの文章を見た後、灯にそう言うのはなんか負けた気がする。俺は多分、今相当引きつった顔をしてるんだろう。

「……少なくとも、……お前よりは」

これ以上顔が引きつらない様にして、俺は言った。

「……そうか：ならば我の目に狂いは無かった」

「へ？」

てっきり今ここで書いてみろとか嫌味なことを言われると思ったのに、狂いは無かったって、え？

「まあ驚くなよ。この文芸部に入るなら、まずは相当な自信家に入って貰いたかったのだ。君は、我よりレベルの高い小説が書ける」と言った。かなりの自信家と見れる」

自信家って……こんな文章を見た後なら誰でも小説が書けるって言うに決まってるだろ。もしかしたらこいつは、阿呆なんじゃないかな。

しかし、灯は何か思いついた子供の様な顔をしている。顔の横にニヤリと文字が見えそうだ。

「我は、我の作品を轟かせる為に、この文芸部を学校で一番人気の

部活にしたい」

学校一とは、大きな事を言うもんだ。

「どうだ？文芸部ぶんぎぶを人気の部活にしてみないか？」

灯は、俺をまっすぐに見つめて、不思議と楽しそうな表情で問いかけてきた。

まあ俺も、この時は目を輝かせていたらしいが。

「学校一人気の部活ね。だがお前の今の文章力で物語を書いていたら無理だろう。…良いぞ、文芸部に入ってやろう」

「ならば、決まりだな」

この物語は、花山南高校文芸部の、今や伝説になりかけている活動記録。

其の者、明らかに異常なり 3ページ(後書き)

こんにちは、石本です。

読んで下さった方に大きな感謝を。

文章力の無い自分が、文芸部で文章の物語を書くのは、あまりにも無謀ですが、頑張っていきます。

さあ次回は、始まる部活。

お楽しみに。

其の部、ようやく始まったものなり 1ページ

学校で一番人気の部活にする。

そうは言ったが、文芸部は、まだ同好会としても成り立っていない。と言う事は、活動が認められるためには、部員集めが必須という事になる。

灯にこの事を話すと、灯はそんな事最初から知っていると云う様に溜息をついた。

「入部して一日で気がつくのは良いが、当たり前事を言わないでくれ」

そう言っ灯は、わざとらしく顔を覆う。

「で、どうやって集める気だ？」

部員は集めなくてはならないが、もう五月だ。殆どの人は部活を決めてしまっている。この状況で部員が簡単に集まるのか？

「とりあえず、ビラでも作ろう。なんでも良いから五人集めないと、私の小説を発表出来ない」

お前の文じゃ発表しても売れねえよ。

「ビラか…本当に効果があるとは思わないんだが…無いよりは良いか」

ただ、ビラなんて作っても、貼る場所なんて無いだろうが。

「あとの当に誰か誘うしか無いだろうな」

灯は結構真面目に考えていた。

確かに、部として認められていない団体が、校内放送を使ったりは出来ない。結局、誰でも利用出来る設備を使うしかない。

「ところでビラって、どこに貼るんだ？」

俺はふと疑問に思った事を灯に聞いた。灯は部屋に一つだけある大きな棚から、真っ白な紙を取り出しながら言った。

「そこら辺の壁にでも貼っておく。まだ部員募集の紙が剥がされていないんだ。新しいビラがあったって大丈夫だろう」

灯は俺の方に紙を数枚渡して、筆箱からペンを取り出した。

「……この紙は何だ？」

何も言わずに紙だけ渡されても、なにをするのか分からない。俺が聞くと灯が

「ビラを考えろ」

短く返事をした。灯の手はもうペンを走らせている。俺も何か書いてみようとしたが、このビラと言う物。なかなか難しい。

まず何をする部活かを書かなくてはならないし、人を惹きつける言葉も必要だ。だが俺は昨日入れられたばかりだし、この部屋の構造すら理解していない。

とりあえず俺は、本のイラストの上に「文芸部員募集！」とだけかいておいた。

「出来たなら人目に付きそうな場所にはっておけよ、薄汚れた倉庫に貼っても意味がないのは分かるだろう？」

灯はそう言って立ち上がった。もうすでに何枚ものビラがその手にある。

「帰りにビラを貼る事。勧誘は明日にしよう」

じゃ、また。と灯は部室を出ていった。そのあと、結局一枚しかできなかったビラを持って、俺も部室をあとにした。

「で？お前はどこの部活に入ったんだ？」

次の日、誠人が教室で俺に聞いて来た。

「文芸部」

俺は短く答えた。

「文芸部？ そんな部があったか？」

誠人は嘘つき少年を見る様な目をしながら言った。

「実際にはない。部員も二人だしな。部室は一応あるけど、顧問もいないし、同好会ですらない」

俺は机の上ではおずえをついている。

誠人は後ろの席から身を乗り出してきた。

「二人？ じゃあ、もう1人は誰なんだ？」

「日之道 灯って言う人だよ」

俺がそう言うと、後ろから驚きの声が聞こえる。

「日之道？ お前、あの日之道さんと同じ部活なのか？」

何だ？ 知っているのか？

「知ってるも何も、同じ学年だろ？ しかも日之道さんっていやあ、この学校で指折りの美人じゃねえか」

驚いた。灯は同学年なのか。ついつい灯と言っていたが、先輩だと思っていた。

しかもかなりの美人。そんな人が、文芸部で部員を集めている……直ぐに部員が集まりそうだ。

「で、何でお前が日之道さんと同じ部活なんだよ」

誠人がじっとりとした目を向けてくる。

それは警察官の様に、絶対に吐かせてやるぞと言っている様だ。

「文化系の部活を見ようと思って旧館に行ったら、文芸部に入れられたんだよ」

段々答えるのが面倒になったので、適当にこたえていく。

「入れられたじゃねえよ。何で日之道さんはお前なんかと文芸部にいるんだと聞いているんだ」

誠人、お前しっかり言葉を理解してるのか？ 俺はどうして文芸部に入ったかを語ったのに、似た様な質問ぶつけやがって。

そう言おうとした時、教室に先生が入って来て、この話は自動的に切り上げとなった。

其の部、ようやく始まったものなり 2ページ

授業が全て終わると、再び誠人が問いただして来た。こいつは俺の答えに納得してない様で、いい加減しつこい。

「だから、どうやって日之道さんに取り入ったんだよ」

「しらねえよ。扉開けたら入部させられたんだから」

「どうやって入部させられる程親しくなったんだ？」

さっきからこんなんがずっと続いてる。もうやめて欲しいと思った時だった。

廊下の方が騒がしいと思ったら、話題の中心人物、日之道 灯が顔を出した。

「山陰君はいるか？」

灯は教室の入り口に立ち、俺を呼んだ。

そして俺に集まる視線。

俺が近づいていくと、灯は微笑み、

「私は今日少しよるところがあるから、部室の鍵を渡しておこう」

そう言って俺に鍵を投げた。よるところ？どこかに用事があるのか？あと今私って言わなかったか？

とにかく俺は鍵を受け取り、背中に刺さる目線から逃れる為に、真っ直ぐ部室に向かう事にした。

部室について、俺は何もする事が無かった。文芸部と言っても、この部屋には本が一冊も無い。俺には灯が来るまで何をしようか悩み抜いた挙句、椅子に座ってただじーっと待つ事にした。

俺が椅子に座ってただばーっとしている時だった。部室のドアをノ

ツクする音が聞こえた。俺は灯が来たと思って扉を開くと、そこには、いかにもおっとりとした女性が、柔らかな笑みを浮かべていた。「こんにちは、文芸部に入りたいのですが」

肩を超えている程度のセミロングの髪を揺らしながら、その人は言った。

「あの…?」

俺がしばらく動けないでいたので、その人はもう一度言った。

「あ。すみません。どうぞ中に。」

我にかえった俺は廊下で立たせてはマズイと思って、彼女を中に招き入れた。その人は「はい。」と笑顔で言って、中に足を踏み入れた。そして俺が差し出した椅子に座ると、

「ポスターを見たんです」

と言って来た。ポスターとはビラの事だろうが、本当に人が来るんだなーなんて俺が感心していると、

「山陰君。遅くなってすまな…」

灯がやって来た。俺はこの入部希望者の事を話そうと灯の方を見て、固まった。

何故か、それは灯の横に、綺麗な髪を軽く縛った女の子がいたからだ。

灯も固まっていた。俺しかいないと思っていた部室に、穏やかそうな人がいたのだから。

完全にフリーズした俺達。

「こんにちは。」

「こ、こんにちは…」

そんな中、入部希望者達は、お互いにあいさつをしていた。

其の部、ようやく始まったものなり 3ページ

「とりあえず、説明して欲しい」

灯が溜息をつく様に言った。その前で、おっとりとした人が座っている。どこかの面接か。

「説明？あの、ここ文芸部ですよね？」

少し困った様な表情をして、俺を見る。俺を見られても困ります。

「確かにここは文芸部だが……まさかお前、入部希望者か？」

灯が聞くと、彼女は文芸部と分かって安心したようで、

「はい。一年三組、木茎葉きくは 香織かおりと言います」

と笑顔で言った。てか、同じ一年生なんだ……

一方、灯も入部希望者と分かって、香織さんを受け入れたようだ。

「そうか、ならば歓迎しよう。山陰君、今日は凄いぞ。なんせ新入部員が二人入ったのだから」

「二人？」

さっき灯が連れていたあの子だろうか。そういうどこに行ったんだ？

「紗良さくら自己紹介してくれ」

すると、机の影からぴよこっと、灯が連れてきた少女が顔を出した。そんなどこにいたのか

「一年五組、原田はらだ 紗良さくら。この部に入る」

そう言って腕を組む紗良。ぶらつきぼうにしているのではなく、子供が大人の真似をしている様に見えるのは何故だろう？

「ところで灯。お前原田さんと知り合いなのか？」

俺が聞くと、灯は眉をわずかに動かした。そして少し俯いて、顔をあげた。

「ああ、紗良とは同じクラスでな、いつも楽しく笑っているのに部活に入っていないと言うから、誘ったんだ」

そういう言われて、俺は紗良を見た。いや、紗良といきなり呼び捨てなのはやっぱりどうなのかな……まあいいか、心の中でだし。

「後一人で文芸部は正式な同好会になれる。だがその前に、せっかく入って来てくれた二人を歓迎する。山陰。その棚から菓子を取り出せ」

そう言われて俺は棚に近づく。すると上段の方に、見た事ある袋が見つかった。灯は部室に菓子を持ち込んだのだろうか？

「お菓子？」

そして紗良が急に起き上がり、俺のてから菓子を取り上げると、勢い良く食らいついた。

その横で微笑んでいる香織さん。

「勢いが良いな。ところで山陰、部の活動ってどんな事を書けばいいんだ？」

「はい？」

俺は素っ頓狂^{とんきょう}な声をあげて灯を見た。

「ほら、ここに活動内容とその目的と書いてあるのだが、よく考えたら何を書けばいいのか……どうすればいいと思う？」

と言って灯は俺に 新規部活動制作報告書 と書かれたを見せる。

「お前、この前文芸部は本を読んだり書いたりする部だって言ってたじゃんか」

俺がそう言うと、灯は

「それだけでは…」

と、少し不安そうな顔をする。俺は頭をかいて、

「じゃあ俺が適当に書いておくから、その紙くれよ」

と言って灯の手から紙を奪い取った。灯はハッとして、俺の方を見たが、何も言えなかった。何故かと言えば、灯が口を開こうとした時、紗良が

「お菓子、無いの？無くなった」

と言って来て、話が途切れたからである。

校内に、最終下校時刻を知らせる鐘が鳴った時には、机の上に大量のお菓子の袋があった。

食い過ぎだろ………

最終下校時刻を告げる鐘が鳴ったので、香織と紗良は帰って行った。俺は菓子この袋を片付けていた。灯はカギを持っているので、帰ろうとしないのだろう。

「山陰」

不意に灯が俺を呼んだ。

「なんだ？」

俺は袋をゴミ箱に押し込みながら言った。

「その……さっき…私の事を、灯、と呼んでいなかったか？」

俺に視線を合わせず、顔を横に向けている灯。しかし、その目はさつきからチラチラと俺の方を見ていた。

ここで俺は考える。灯と言っているのはあくまでも心の中で、呼ぶ時は【日之道】と呼んでいた筈だ。口にだして灯と呼んだだろうか？

「先程、紗良の事を聞いて来た時、我を 灯 と呼んでいた筈だと思う…」

段々小さくなる声。俺はそれを聞いて、ああと呟いた。

「……ところで灯、原田さんと知り合いなのか？」

あの時、灯が少し不思議な表情をしたのは、急に名前で、しかも呼び捨てで呼ばれたからか。

「確かに呼んでたな。…もしかして、いやだったか？」

「嫌では無い。ただ、少し驚いてしまっただけだ」

「……………そーいやお前も、何時の間にか山陰って言ってるな」

「……………嫌か？急に名前で呼ばれたものだから、つい…」

「嫌じゃない。てか、君とか付けられるとなんかこそばゆい。いっそ龍夜りゅうやでも構わない」

なんの話をしているのだろうか？それなりに気まずい空気になったので、俺は「じゃ、また明日」と言って部屋を出た。帰り道。俺はポケットから取り出した紙を見ていた。

新規部活動制作報告書。そこに書いてある事を読んでみる。

その一、部員数が五名以上いる事。そして、下の空欄に入部予定者の名前を必ず記入する事。

その二、活動場所を記入する事。他の部活動と場所が被っていた場合、学校の許可が降りなかった場合は、認められない。

その三、活動内容とその目的を明確に記入する事。活動内容が学校の理念にそぐわない場合は、部として認められない。又、明確な目標がなければ、部として認めない。

：どうしたもんかねえ。

一つ目は、あと一人集まればいいのだから、別に考えなくてもいい。二つ目は、もうすでにある。同好会としても成立ってない集りが、部室を持っているのはおかしいのだが、お陰で考える必要がなくなっている。

問題は三つ目だ。文芸部はこの学校にもありそうな部だし、活動内容は簡単に通るだろう。だが目標がなければ部として認められない。なんかの賞に入るとかじゃ駄目だろうし、良い目標が浮かばない。とりあえず保留だな。

俺は空を見た。日が沈みかけている空は、色んなものが混ざり合っているように見える。

「まあ一応、文芸部は無事に発進する事が出来ましたーと」
歩きながら、俺は呟いた。

其の部、ようやく始まったものなり

4ページ(後書き)

冬なのにまだ自室に扇風機があります。
早く片付けないと。

じかっーい。ファイル001
お楽しみに。

其の者達、学校の人気者なり。 1ページ

文芸部、部長一（仮）

日之道 灯。

一年生の中で、いや学校の中でその容姿はトップクラス。先輩だろうがなんだろうが関係なく人気を集めている。

今まで告白した人は少ないのは、本人が呼び出しに全くと言う程応じないからである。

人とはあまり話さないので、詳しいことは謎が多いが、笑顔を振りまく性格でないので、最も笑顔が見たい人N O. 1と言われているらしい。

「で、この情報は何の意味があるんだよ？」

俺は持っていた紙を誠人に返した。放課後、教室を出ようと思ったら、誠人から紙を渡された。そこに書いてある事は、灯についてだ。俺は目を通しながら、ストーカーとしてこいつを訴えようか考えた。

「お前なあ。ここに書いてあること、見てみろよ」

誠人は人とあまり話さないと書いてある所を指差す。

「あまり人と話さないあの日之道さんと、一緒に部活にいるってのが問題だ」

真剣な眼差しを向ける誠人。何なんだこいつ。

「だから？」

俺はほおずえをつきながら聞いた。

「どうしてお前が、日之道さんと二人で放課後一つの部屋にいるんだよ？」

「変な風に言うな！それに今は二人じゃねえよ！」

「え？」

俺がそう言うと、誠人は驚きの声を上げた。

「二人じゃない？」

「ああ、昨日入部したひとがいるから、二人じゃない」

「なんだそのうらやましい奴は……」

拳を強く握る誠人。

「一応言っておくが、野郎じゃないからな？」

「えっ？じゃあ誰だ？」

キョトンとして、俺を見る誠人。

「確か木茎葉さんと原田さんだ。じゃあ俺は部活に行くから」
そう言って俺は教室を飛び出した。

「遅くなった理由がそれとはな……」

灯がこちらをジト目でみる。俺の後ろで沙良と香織がこちらを向いている。俺は重たくのしかかる重圧感に耐え切る自信がわかなかった。油汗がヤバイ。

「まったく、日頃から我を見る奴が多いとは思っていたが、その様な物まで作られているとは」

はあーっと大袈裟に溜息をつく灯。俺は見ただけなのに、なんでもんなに緊張しなきゃならないのだろう。

「でも、それは灯さんがとても魅力的みりよくてきに思われているからでしょう」
香織さんが呑気のんきな声で言った。それを聞いた灯は横を向いて

「そ、それなら思うだけにして欲しいものだ。いくら我が魅力的と言ったって、我のデータの様なものを勝ってに作られていると言うのは気に食わん」
と言う。

「無視。彼等が勝手にやってるだけ」

沙良は呆れた声で言った。こいつは手短に話してくな。

「ああそうそう、その紙に書いてあったんだが、人とあまり喋らないってのは、本当か？」

こいつ、ここ数日文芸部に居ただけでも、人とあまり喋らない様には見えなかったからな。

だが俺が聞くと、灯は俺に向かって、複雑な表情をした。

「答えない」

灯が冷たい声で言う。何か怒らせてしまったのかな？顔がこわばる。香織さんと紗良は、無言で俺を見ている。

「私の小説に堂々意見するものだから、そう言うものはわきまえてると思っっていたが…」

溜息をつく様に言葉を出した。

「おい、わきまえるも何も、疑問を口にしただけじゃねえか」

「疑問に思ったからと言って、何でも聞いていい訳ではないでしょう？」

香織さんが言った。灯は

「まあ、まだお互い知らない事だらけだしな」

と、諦めた様に言った。俺はなにがなんだか分からないままだった。

其の者達、学校の人気者なり 2ページ

一年三組

木茎葉 香織。文芸部。

穏やかで、大人しい、神秘的な人。しんぴどんな人にも優しく、彼女を取りまくオーラに当てられるだけで幸せな気分になれる。

真面目で、成績も良く、先生からの信頼も厚い。もちろん勿論、告白する者は後を絶たない。

「こんなのは結構作られてんのな」

誠人が昨日に引き続き、香織の事が書かれた紙を見せて来た。

「お前、この資料しりょうが作られるのはレベルの高い娘だけなんだぞ？」
誠人が囁み付いてくる。

「変態だな……」

俺は乾いた笑いしか出来なかった。

「ところで、原田さんってどの原田さん？この学年結構いるからわかんねえよ」

「したの名前は紗良って言ってたぞ」

俺は上の空で答えた。

「まあ、私のもあったんですか」

おっとりしてはいるが、彼女はとても驚おどろいてる様だ。目を丸くしている。

「そんなものを作っているとは、同級生とは言え引く」

灯は完全に呆れた様だ。俺はふと思って紗良いさを見た。紗良は目線が合うと

「情報元の人。変態」

と言った。それについては俺も同感だ。

「ところでみんな、この部室が、我は文芸部らしくないと思ってるのだから」

灯が俺達を見渡して言った。

「確かに、文芸部らしくないですね…」

香織……この人は、香織さんって読んだ方が楽だな。ともかく香織さんも同意した。

俺はなんとなく原因が分かったたので、二人に言った。

「それって、本が無いからじゃねえの？」

その場の空気が固まった。

「え？俺なんか悪い事いっ…「それだっ！」

灯が突然叫んだ。俺はたじろぐ。

「山陰、凄い事に気がついたな。確かに、文芸部なら本ぐらいある物だ。山陰、明日本を持って来てくれ」

「はい？」

「とりあえず十冊程な。香織と紗良も持って来たい本があれば持って来てくれ」

俺の十冊は強制ですか？俺はあまりの事に抗議する気さえ起こらなかった。

脱力して椅子に崩れる。後ろから視線を感じたので振り返ると、紗良がこちらを見ていた。

「あなたの本。ジャンル」

紗良はそういった。俺は意味を考えてから、紗良はどんな本を持ってくる気なのか知りたいのかと思った。

「家にある適当な本を持って来るよ。ジャンルとかもバラバラだな」俺がそう答えると紗良はムツとする。俺は意味を間違えた様だ。再び俺が解説に挑んでいると

「私は色んな本を読みますよ。恋愛物も、学園物も、詩とかも」香織さんが紗良向かって言った。

「わかった。私も」

紗良が笑顔で香織さんに返す。

「ああ！好きなジャンルを聞いてたのか！」

俺はポンと手を打った。紗良が睨にらんで来る。

俺はごめんごめんと誤魔化して、

「俺はやっぱファンタジー系かな。あの世界観せかいかんは引き込まれるね」

俺はそう言って紗良を見た。紗良は俺の答えに満足した様で、目線が合うと頷いた。

「灯はどんなの読んだ？」

俺は振り返って聞いた。灯は一瞬驚いた表情をして、すぐにムスツとした。

「おい？どうした？」

俺は座っている灯に近づいて、顔を覗き込んだ。

「我の好きなジャンルを知りたいのか？」

灯が俺を見上げる様にして問う。目が鋭く光ひかってるもんだから、上目遣いでも何も思わない。

「我は絵本を好む。」

俺は灯が言った事を理解するのに、じかںがかかった。

みんなのよく読む本のジャンル。

香織さんと紗良は色んな本を読むらしい。

俺はファンタジー系が好きで良く読んでいる。

そして、この文芸部部长、日之道 灯が好きなジャンル。それは――

「絵本」

だそう。笑うなよ。本人は真剣なんだから。

「絵本か……そりゃなんでだ？」

嫌な感じに聞こえない様に、俺はなるべくいつもの口調で言った。

「なんでだ？ 気になるのか？」

灯は俺を見上げながら言った。

「我が絵本が好きな理由はな、絵本と言うのは、子供達にもわかりやすい言葉で書かれていて、大人でも楽しめる物語が書かれているからだ」

はつきりと答える灯。堂々とした口調としっかりとした理由は、さつき笑いそうになった自分が恥ずかしく感じる程だ。

「我もあのような物語を創る」

あの文章力でなければ感動しそうな言葉だな。

「灯。物語を創るって、部誌とかの事とか決めてねえだろ？ 俺らはまだ同好会でもねえしさ」

俺は溜息混じりに言った。
ためいき

「やっぱ部誌とか書くのですか？」

灯が反応する前に香織さんが聞いて来た。

「一応文芸部ですし、何より部長が乗り気なんです。香織さんは、書くのはどうですか？」

「書いた事はありません。山陰さんは書いた事あるのですか？」

「いや、ありませんよ。でも書くのも良いんじゃないかと思ってる」

俺がそう言うと、香織さんはふふっと笑った。

「敬語、同じ学年なんですし、崩して下さい」

「だったら香織さんも……」

「私はこの方が話し易やすいんです」

「だったら俺も気にしない事にするよ」

香織さんと談笑していると、腕を引っ張られている気がした。見ると、灯がこっちを向いている。

「部誌は早めに作りたい。どうすればいい？」

普通のお願いの方法だな。まあ、まわりくどい方法より良いか。

「先生に、同好会でなくても活動できる様にさせてもらわないと。あともう一人入ってくるかだな」

俺は頭にある情報をまとめたのだが、この二つしか思い浮かばなかった。情けない。

「そうか……難しいのだな。それより、皆が折角集みな せっかくまったのだ。どこかに遊びに行かないか？」

灯は香織達の方を向いて言った。

「遊びに行く？」

俺は灯に聞き返した。

「ああそうだ。親睦を深めるのを目的として、皆でどこかに遊びに行こうと思う。場所とかそう言うのは明日決めるつもりだ。」

俺は香織達の方をみた。二人は顔をこちらに向けている。やっぱり急に遊びに行くと言われて困っているのだろうか？

「楽しみ」

「良いですね。皆さんの事も知る事が出来ますし、何よりとても楽しそうで」

二人はそう言って微笑む。意外とこのメンバーは息があってるのかな。俺は密かに思った。

其の者達、学校の人気者なり。 4ページ

一年五組

原田 紗良 文芸部

第一印象は活発そうだが、その見た目と違い、口数は少ない。成績は良いが、運動はそこそこ。実は密かに親衛隊がある。

告白する者はとても多いが、朝教室で返事をして来るので、男子達としては心臓に悪いようだ。

「……………本当。どんな人でもあるのかコレは」

俺は頭を抱えた。灯、香織とあったから、沙良のがあっても不思議ではないが……………もしかしたら、この学年全員分のがあってもおかしくないかもしれない。

「何言ってんだ龍夜。若い先生もあるぞ」

まじめな顔で誠人が言った。その答えを聞いて頭痛がしてくる。

「……………入学して一カ月でそこまでいったか」

「その男子、警察に出せば捕まりそうだな」

文芸部室で灯が言ったことは、当然のことだろう。

「私の、あるんだ」

沙良も驚いているらしい。目を丸くしている。

「暇人なんですネ……」

香織も呆れている。俺も呆れている。部活に入る事を勧めて来たの

はあいつだが、あの資料を見せられたら軽く引くぞ。

あしやこうえん

「変態の話はおいといて、遊びに行く場所は近くの芦谷公園にしよ
うと思う」

灯が机に手について言った。

「芦谷公園って、あの大きな公園か？」

「そうだ。あの広くて青々とした芝がある公園だ」

「芦谷公園ですか。何時位に集まるのですか？」

「芦谷公園。どこ？」

「紗良は知らなかったか？なら我と一緒に行こう」

「灯、時間は？」

「十時位で良いだろう。公園南口の鳥の像の前で集合だ」

「分かった。楽しみ」

「んじゃ十時に鳥の像な」

「何か持って行った方がいいのでしょうか？」

「確かに、灯、荷物どうすんだ？」

「山陰、さっきから訪ねてばかりだな。昼食を持ってくればいいぞ」

「分かりました。楽しいことになると思いますね」

「オモチャ。持っていく」

灯の言葉を皮切りに、俺たちはその場で話し合った。まるで雑談する様に。いや実際雑談なのだが。

それにしても、公園で遊ぶだけなのか？高校生なんだし、公園でなくとも良いと思うんだが……。そう思っていると、灯が立ち上がり、机に両手をつけて、部屋にいる全員に向かって言った。

「では明日は十時に鳥の像の前で集合だ！」

その顔は、やる気に満ちていた。

其の者達、学校の人気者なり。 4ページ（後書き）

この回は人物紹介に一番近い話だと思います。山陰君は無いけど、彼は調べられてませんよ、男性ですから。

さ、次回は、あつそびましょ
おたのしみに

其の活動、遊びとは違うものなり 1ページ

集合時間の十時の三十分前に、俺は鳥の像の前に来た。こういうものは人を待たせない様に早めに来るのがマナーだからな。

そう思って鳥の像の前に行くと、香織がもうすでに來ていた。

香織はこちらに気が付くと、にっこり笑って手を振った。俺も手を振り返す。

「早いな。待ってたのか？」

「いえ、今来たところですから」

そう言って笑顔を向ける香織。なんだか、得をした気分だ。

「山陰さんも結構早いですね」

「まあ、人を待たせない様にな」

「心遣いが行き届いて……あ、灯さんです」

香織が指を差した方向を見ると、灯と紗良が歩いて来た。二人はこちらに気付くと、かけあしでやって来た。

「二人とも早いな。集合時間の二十分前に揃うとは我も思わなかった」

「待たせた？」

灯と紗良が像の前に来て言った。

「いや、さっき来たばかりだ。ところで、公園で遊ぶって言うだけ、何をするんだ？」

灯は、俺がそう聞くとはっとした表情で固まった。

「……決めてないのか」

俺は溜息をついた。まさかなんの予定も無しに集まっていたとはな。

「あの……まずは公園を回ってみませんか？」

香織が少し遠慮がちに言った。香織の後ろの看板には、公園内一周散歩コースと書かれていた。

「散歩。賛成」

紗良が真っ直ぐに香織を見ながら言った。

「うむ、自然を見ながら歩くか：では、右回りか左回りか、どちらで回る？」

「適当でいいだろ」

俺たちはそうして、歩き始めた。

歩いていると会話が弾み、楽しい気分になる。自然に囲まれながら歩くのがこんなに気持ちがいいとはね。そう思っていると、香織と沙良がしゃがんでいた。

「どうした？」

不思議に思って声をかけると、二人がこちらを向いた。

「この花。誕生花たんじょうか」

沙良が指さしながら言った。そこには茎が細く、花は外側が黄色く、内側が赤茶色の花があった。名前は知らないが。

「誕生花か」

灯がその植物を見ながら言った。誕生花とは、産まれた日時にわじにちなんだ花のことだ。だが「この日にこの花」というのは国や地域によって違うらしい。一体どこの定義を参考さんかにしているのだろうか？

「へえ。でもよく花の種類が分かったな。なんかチューリップとかじゃないと見分けがつかねえや」

俺は花を見ながら言った。

「この花は、多分ハルシャギクです」

香織が花を見たまま言った。紗良も花を見続けている。

「紗良、この花好きなのか？」

灯が二人の上から覗き込む様にしてきいた。

「私。この花。同じ」

紗良が立ち上がって言った。て事は、ハルシャギクが誕生花の日が、紗良の誕生日って事か？これで意味あってるよな？

「そうか、我も自分の誕生花を調べてみたくなった。紗良、どうやって誕生花を知ったのだ？」

灯がそう言って、紗良と歩き始めた。後から俺と香織もついて行く。「自然は見るだけじゃ無くて、語れる物なのかなあ」

歩きながら、俺は呟いた。

「そうですね。自然を感じるのも素敵だけれども、こうやって話すのも良いですね」

横にいた香織が言った。俺達四人は、談笑しながらその後も公園内を歩いていた。

其の活動、遊びとは違うものなり 2ページ

公園内を歩いた俺達は、休憩しようと、園内の芝生しばふの生えているところにいる。

「時間もちょうど良いし、皆みな、ここで昼食にしよう」

灯が提案した。俺と香織と紗良は、芝生の上に座っていたから、首を縦に振って了承した。

「ん？皆みんな自作なのか？」

俺はコンビニ弁当を取り出しながら言った。女子三人は、俺から見たら小さめの弁当を取り出している。だが三人とも同じ大きさなので、あれくらいが普通なのだろう。

「山陰はコンビニ弁当か？食べ過ぎると体に悪いぞ」

いや、普段は普通の食事だよ。

「そばがお好きなんですか？」

いえ、これが安かったんです。

「お金、無いの？」

いや、無い訳じゃないよ。

そんな話をしながら昼食をとっていく。コンビニ弁当なのに、公園で人と食べるだけで美味しく感じる。

昼食を終えると、灯が大きなバックから道具を取り出して、

「食後の運動うんどうだ。バトミントンをするぞ」

と言って来た。

俺らはラケットを持って、バトミントンをした。バトミントンと言っても芝生の上で、ただシャトルが落ちないようにするだけのものだ。シャトルを追いかける女子三人は、かなり絵になるな。

そう思っていると、頭にシャトルが落ちおてきた、どうやら見とれていて気付かなかったらしい。

「山陰、なにをしている、ぼーっとするな！」

灯がラケットを振りながら言った。スマンと言ってシャトルを取る。

――と、

「?　どうかしたんですか？」

俺はその場にしゃがみこんだ。

「どうしたのだ？」

「大丈夫？」

三人が近づいてくる。俺は三人に見えるように地面から今さっき取った物を見せた。

「四葉のクローバーだ」

四葉のクローバー。幸せのお守り。それを見せると、三人は驚いた。まあ、珍しいもん^{めずらしい}な。

「よく見つけましたね」

香織が目丸くしている。これは珍しい。

「すごい。すごい！」

沙良が本気で驚いてるようで、同じ言葉を連発している。これも珍しい。

そんな中、一人はやっぱり予想どおりの事をしてくれた。

「よし！ではもっと四葉のクローバーを見つけよう！一人一本はほしいな」

灯が、弾んだ声で言った。

「「おー」」

勢いが弱いながらも拳を突き上げる香織と紗良。俺は四葉のクローバーを探すという地味^{じみ}な行動に、脱力した。

「結構探したけど、結局見つかったのは三つか…」

太陽も沈みかけ、夕焼けに染まる空を見ながら俺は言った。見つかった四葉のクローバーは三つ。一人に一本では、あと一つ足りない。

まあ、珍しい物だし、三つ見つけただけでも凄いかな？

「ふむう。日が暮れてしまっでは探せないからな」

「別にいいだろ？こうやって楽しく過ごせたんだしよ」

夕日を見ながら俺は言った。今回の遊びは、それなりに楽しめたんだ。

其の活動、遊びとは違うものなり 3ページ

公園での遊びをした後の月曜日。文芸部室に集まった俺達に、灯は原稿用紙を手にながら言った。

「皆^{みな}。この前行ったレクリエーション。公園の事をこの原稿用紙に書いて欲しい」

「は？」

俺は素っ頓狂^{とんきやう}な声をあげた。香織と紗良は灯の方を向いている。

「だから、運動会の感想と同じ様な物だ。文芸部部长としては、部員がどのような文章^{ぶんしょう}を書くか見てみたいのぞな」

あの文を書くお前が言うか。…でもまあ、あれがただの遊びじゃ無くて、文を書かせる目的があったのか。

感心していると、目の前に原稿用紙。灯を見ると、シャーペンを持って書き始めている。

俺も筆箱^{ふでばこ}を取り出して、書き始めた。

えっと、まずは昨日した事だ。確か集合して、公園の散歩をして、お昼を食べて、運動をして、クローバー探しをしたんだ。

うん。結構^{けっこう}書く事があるな。

香織と紗良も書き始めている。その光景をみて、文芸部らしいなあと思つた。その後、再び俺は書く事に専念する。適当に感想を入れながらやった事を書くだけで。

数十分して、皆^{みんな}書き終えた様だ。俺は一息ついて、発案者である灯を見た。灯はとうに書き終えていたのかだれていて、机に顎を乗せている。紗良は鉛筆を転がして、香織は灯を見ている。俺はこのままにいる訳にも行かないので、声をかけた。

「おい灯。書けたぞ」

声をかけると灯は跳び起き立ち上がった。

「そうか！書き終えたか。では我が預かるから、皆、^{みな}持って来てくれ」

俺は微笑んでいる灯に原案用紙を渡す。と、香織も横から灯に用紙を渡した。

香織は俺を見て、微笑んだ。そのとても柔らかな笑みに、俺は一瞬、固まってしまう。

そのあと紗良も無事提出して、本日は解散となった。

其の活動、遊びとは違うものなり。 4ページ

次の日。

俺は長々とした授業を終え、文芸部室に向かっていた。香織は委員会。紗良は掃除当番で遅れると言っていた。俺は旧館の中を通過して、文芸部室の扉を開いた。

「灯。いるかー？」

そして、俺は固まった。棚が一つと、学校の会議で見かける机と椅子しか無い部室。その中で、一つの机の上に、突っ伏して寝ている灯が居た。近づく、灯の手元に昨日書いた公園での事の作文があった。俺は灯を起こさない様にそれを持つ。

部員全員で公園に行った。とても楽しかった。

相変わらず、短い文章だ。

俺は原稿用紙を一枚めくる。そこには、「木茎葉 香織」と書かれていた。

土曜日に、文芸部のレクリエーションとして、部員全員で公園に行った。今思い返してもとても楽しいもので、特に私が楽しいと思ったのは、公園内で行った鬼ごっこだ。

鬼ごっこは、勿論子供達がやる様な追いかけっこ事だ。しかし、公園内を大きく使った鬼ごっこはとても楽しく、面白いものだった。あちこち走り回り、追いかけ、追いかけて。気が付けば、お昼になっていた。

みんなシートの上でとる食事はピクニックのようで、それまで走

り回っていたからだろうか、とても美味しかった。

凄い文章だな。さっき読んだ物と比べると、特に。あの時の鬼ごっこは面積が広がったから鬼になると大変だったな。

そんな事を考えながら原稿用紙をめくる。

俺のだったので飛ばして最後、「原田 紗良」と書かれた文章を読む。

この前公園に行った事が、この作文を書くためだとは思わなくて、私は驚いて、何を書いたら良いか分からなくなつて、とりあえず、最初に公園を歩いた事でも書こうと、考えて、書いてみる。

公園内での散歩は、木々に囲まれて、とても気持ちの良いもので、私達は、色んな話をして歩いていると、整備された道の脇に、綺麗な花があつて、私が知っている花もあり、その花についてみんなと話した事は、凄く楽しくて、また行きたいと思った。

……これは意外な文章だな。

いつも無駄の無い言葉で喋ってるから、てっきり文章も同じ感じだと思っていたが、「。」が二つしか無い。

今読んだ作文を見ると、一番上手なのは香織って事になるな。

俺は原稿用紙を元の位置に戻した。灯はまだ寝ている。寝心地が悪いのか、顔をしかめている。俺は灯の向かいの席に座って、持ってきた本を読み始めた。

しばらく読んでいると、扉が開いた。目を向けると、紗良が鞆を持

っている。

「よう。すまんが、少し静かにしてくれ」

そう言っただけ俺は灯を指差す。紗良は灯をみて納得した様で、俺の隣に座った。俺は本を読んでいたが、紗良がさっきからこちらを見ているようで、落ち着かない。

「なあ紗良、どうかしたのか？」

視線に耐え切れなくなっただけ俺は紗良に話しかけた。

「本、取っていい？」

そう言っただけ紗良は紙袋を指差す。紙袋のなかには、俺が持って来た本が入っている。

なるほど、中に入っている本が気になったんだな。

「ああ、良いぞ」

俺がそう言っただけ、紗良は紙袋を取って、中の本を見ていく。その時、部室の扉が開いて、香織が入って来た。

「こんにちは。あら、灯さん、寝ているのですか？」

扉を閉めて、灯を見る香織。

「ああ、だから少し静かにしてくれ」

俺は本から顔を上げて言った。香織はこちらを見て、笑顔で頷いた。そして、その横にいた紗良を見て、紗良の足元にある紙袋をみて、俺を見た。

「あの…この本、全部山陰君が？」

紙袋を指差しながら、香織が言った。

「ああ、持って来いと言われてたしな。だが流石に十冊は重かった」俺はそう言っただけ肩を回す。

「一回にそんな多く持ってこなくても良かったのに…」

「ははっ。そうだな」

香織は笑っただけ、紙袋の中に手を伸ばす。

「んんっ」

その時、灯が声を上げた。俺はビックリして灯を見ると、灯はもぞもぞと動いて、顔をこちらにむけた。まだ眠そうな顔をしている。

「んむう。皆居たのか？」

俺は本を閉じ、笑いながら言った。

「ああ、皆そろってるぞ」

其の活動、遊びとは違うものなり。 4ページ（後書き）

小学校の遠足とかは、後日必ず感想を書くんですよ。書くのは凄く面倒で、白紙の原稿用紙を睨んで居ました。

其の者、相談者なり。 1ページ

六月もそこそこ。俺らが文芸部室で行う事は、何時の間にか、雑談と本を読む事に限られていた。同好会にならない。新しい部員も来ないからか、灯は燻った火種の様に不機嫌で、その不機嫌な雰囲気は、部室に広がり、俺達も難しい顔をしていた。どうにか出来ないのだろうか、だが下手に動けば無理難題を押し付けられるかもしれない。ここはじっと我慢するしか無いと半ば諦めた時だった。

「ぶんげー部ってここ？」

扉が、勢いよく開いた。

見ると、そこには、ショートヘアの女の子が肩で息をしながら扉の場所に立って居た。

「うむ、ここは確かに文芸部だが……」

灯がそう言うと、その女子は、部屋の中に入って来て、灯の前に立った。俺達は呆氣に取られ、ただ見ている。

「あなた達、物語とか書いてる？」

真剣な表情で、彼女は言った。その口調は、怒った様にも、懇願する様にも聞こえる。

「まだ書いてはいない。だが、驚く様な作品を創ろうとはしている」
灯は表情を崩さずに言った。女の子は、灯の言葉を聞くと、真っ直ぐに灯を見て言った。

灯も、真っ直ぐにその女子を見ている。

「書いて。なんでも良いから。そしてそれを私に頂戴」

今度は、焦って助けを求める様に言った。気のせいかもしれないが。一方、灯は腕組みをしていて、彼女の言葉を聞いていた。そして、大きく息を吸うと

「良いだろう。この文芸部の書いた小説の読者一号。お前にする！」
凜とした表情で、はっきりした声で、そう言った。

女の子、山中さんが帰った後、俺達は、会議の様なものをしていた。
議題は：

「山中さんに贈る物語を、皆で作る事にする。まずは、この物語の大まかな話。原案を考えようと思う」

だ。どうやら今回は、文芸部全員で、一つの物語を創るつもりらしい。

「原案。アイデア」

「どんな物が良いでしょうか」

二人も結構やる気だ。俺も「面白い物を書こう！」と意気込んでいたが、その前に俺は灯に質問した。

「ところで、どうして山中さんに作品を読ませる事にしたんだ？」
そう言うと灯は、俺の方を見て、

「他人に評価して貰うと言うのはとても良い事だ。上手く行けば、口コミで広がるし、自分の实力を知る事も出来る」

ニヤリと言う擬音語が聞こえて来そうな笑みを浮かべて、灯は言った。成る程。納得した。確かに良い評価貰ってる作品なら、読んで見たくなるよな。逆に悪い評価だと、『皆この物語を読んでつまらないと思ったんだ。』と感じて読まなくなるだろう。

「今回はその最初の評価だ。こう言うのは最初が肝心だから、手を抜くなよ」

灯は、俺達をみて言った。なんかの司令官みたいだな。

物語を創るのは、結構面倒なはずなのに、俺はワクワクしていた。ただ本を読んで雑談している日々より、なんか面白そうだからな。

其の者、相談者なり 2ページ

周りを見ても、そこは何も無かった。ただ白い所に、おれはフワフワと浮いていた。俺は死んでしまったのだろうか、まあ良いか、あんな人生。たいして面白くも無いし。

「まあ、そんな悲観的になるで無い」

……誰だ？

「ワシか？ そうじゃなあ。ワシは一般的に神と呼ばれておる」

………神様だって？

「そうじゃ。まったく、お前はせっかく生を受けたというのに、ちつともそのありがたみを感じない。だからもう一度生を受け、人生の意味でも見つけてこい」

おい、それどういことだよ。

「それでは、次の世界に行ってこい」
パアアアア…

「却下」

ビリビリと紙を破り捨てて、ゴミを見る様な冷たい目で俺を見ながら灯は言った。

「酷い？」

「どこがだ。こんな何回も使い古された物語の始まりなど、破り捨てて当然だ」

悪びれる様子もなく、灯は言った。

「第一、物語の原案を考えて来いと言われたって、そんな急に考えつく訳ねえよ！」

「そこをなんとかひねり出すのが我が文芸部の部員と言うものだ」

「淡々と言うなあお前は。で、お前は何か考えて来たのか？」

「勿論だ。この紙に書いてある」

そう言っ灯は一枚の紙を渡す。

「物語が始まりました。

主人公が平和に暮らしました。」

「だからはしより過ぎだあ！」

俺は目の前にちゃぶ台があったらひっくり返す勢いで言った。

只今、俺達は、山中さんに渡すための物語の原案を考えている。今のところいい案は2、3本出ている程度で、物語を描くのは一筋縄ではないかないと再確認をした。

灯に破られた原稿はあとで掃除することにして、俺は椅子に着いた。俺が椅子に座ると同時に、今度は沙良が原稿用紙を灯の下へと持っていく。灯は原稿を受け取り、吟味する様に読んでいくと、保留ゾーンの原稿の束に乗つけた。沙良は灯に何か言ってから席に戻る。そして俺のほうを見てふっと笑った。明らかに馬鹿にしてやがる……。俺はむすつとした目線で沙良を睨むが、沙良は顔を背けて視線をかわす。俺は睨むのをやめて再び原案を考える作業に戻った。と言っても、すぐに案が思いつく訳が無い。頭をガシガシと書いても、シャープペンを五十回まわしても出て来ない。香織も紗良も、案をほぼ出し切ったらしく、悩んでいる。ピタリと出て来なくなった原案に痺れを切らしたのか灯は

「今日はもう終了だ。続きの作業は明日にしようか」

と言って、部室から姿を消した。俺達は顔を見合わせて、帰ることにした。

文芸部の物語創作活動は、まだ、原案すら決まっていない。

其の者、相談者なり。 3ページ

次の日、俺は何か参考になる物はないかと、昼休みに図書室に来ていた。が、どんな本を読んでみれば良いのか分からない。こんな事なら購入のメニューを真剣に選んだ方が良かったかもしれない。そんな事を考えながら本棚から本を一冊抜き出す。

その本のページを暫くめくっていたが、駄目だ。俺には読めん。なんつーか文が硬い気がする。俺は本を元の位置に戻して、別の本を手にする。この本、面白そうだな。そう思って読んでいると、

「あの……山陰君？」

名前を呼ばれた。顔を上げると、そこに居たのは

「………香織……」

そう、俺に声をかけて来たのは、香織だったのだ。香織はたくさん本を両手に抱えている。

「図書室に、なんか用事でもあったのか？」

俺は本を閉じて香織に聞いた。

「いえ、図書委員なので……山影君は？」

「別に大したことじゃ……」

俺はそう言って笑った。香織は微笑んで、抱えていた本を棚に戻し始める。その姿を眺めながら、俺は昨日の事を思いかえしていた。

「……香織、どうして山中さんは、俺たちに物語を描いてくれて頼んだんだろうな」

その問いを俺は、独り言の様に、聞き逃してもおかしくない位にポツンと呟いていた。だが香織は動かしていた手を止めて、ゆっくりと俺のほうを向いた。

「どうして……とは？」

俺の方をじっと見ながら、香織は聞いて来た。俺は、続きを言った。「だって、物語を作る事に関して俺達は素人以下だぞ。それなのに、お勧めの本は？とか、この本どんな内容だった？とかじゃなく、物

語をつくれって……」

文芸部はまだ始まって一カ月も経っていない。それどころか部としては規定に届かず、認められてすらない。そんな部に頼みごとなんて、ホント、どうしてだろな。

「確かに疑問ではありますね。でも、そういうことを考えているのなら、文芸部が作る最初の物語を、とても素晴らしいものにしましょうよ」

黒か茶か、あいまいな色の髪を揺らしながらそう言って、香織はとなりの本棚に移って行った。

「そうだな」

俺は香織の背中を見ながら呟いた。

図書室からでて少し校内をうろついていた俺は、五時間目が始まるのを無視して旧館にある部室に向かった。どうして教室に行かずに部室に向かったのか。その理由は特に無い。ただなんと無く、部室が気になったのだ。そうして部室の前に来た俺は、誰もいないはずの部室に入って行った。

其の者、相談者なり。 3 ページ（後書き）

あけましておめでとうございます。

この話が2012年最初の投稿。

この物語も、徐々にいろんな人が読んでいってけると願ってー
ー

其の者、相談者なり。4ページ

教室では、五時間目がはじまっている時刻。

部室の中には、長机に突っ伏して、静かに寝息を立てている灯が居た。

「……………」

俺は驚いて、扉を開けたまま固まった。

今、教室では五時間目の授業中だ。灯は、昼休みから寝続けて居るのだろうか。チャイムにも気付かず寝るとはな。

俺はフーッと息を吐いて部屋の中に入る。すると、寝ている灯の前に、何枚かの紙がある事に気が付いた。いつかの原稿用紙を思い出す。取り敢えず俺はその紙を何枚か手に取って読んでみる。

紙には、相変わらずの文章力で、原案が書かれている。その中に、昨日の保留ゾーンに分類された原案が混じっている。

読んでみれば色々あるな。ただオセロをやるのとか、雲の上に行くだとか、空色の髪持つ女の子がヒロインだとか、そんなのが。

昨日、結構な数の原案が出ていたんだな。灯が破ったり突っ返したりしてたから、こんなに数があるとは思わなかった。……………あれ？　そういえば破られてたのってほとんど俺が出したのだった気がする……………。

そんな原案メモを読んでいくと、俺はだんだんと不思議な気分になっていった。なんていうのだろう。原案は一個一個、違うことを描いているのに、少し考えるだけで、このバラバラの原案を、まとめあげられそうなのだ。全部まとめられそうではないが、合体させることが出来る気がする。

今俺の右手が持っている盗賊団の話。それに、左手にある精霊が残した宝をめぐる話は、繋げることが出来そうだ。それに…これとこれも……………。

俺は夢中で原案を読んでいった。繋げることが出来そうな物語を

探した。つながったら、一つの山にまとめた。気がついたら、時計は六時間目を終えている時刻を指している。もう、放課後だ。

(少し夢中になりすぎてたか……)

そう思った瞬間

「作業はおわったのか？」

「うわっ！」

ふいに後ろから声がした。驚いて振り返ると、灯が腕組をして窓際に立っている。

「そんなに驚くな」

灯はそう言ってふう。とため息を吐く。

「驚くなって言っくんなら驚かさなくてくれよ……」

寝ていると思ってた人が、後ろから声掛けてきたらビックリするだろ……。

俺がそう言っくと灯りは、今度は深い溜息を吐いた。そして、腕組をしたまま俺を睨むと

「驚いたのは我のほうだ。眠りから覚めて目を開ければ、お前が原案を取ってまとめて並べて、我が寝ている間に何をしてたんだお前は！」

と叫んだ。

其の者、相談者なり。4ページ（後書き）

ついにと言いますか、やっとと言いますか、
ユニーク100人を越えました。

この物語の最初の記念…ですか？

其の者、相談者なり。5ページ

灯は、威圧感たっぷりに俺を睨んでいる。

「え…ええと」

「なんだ？さっきまでやっていた事を、説明すればいいだけだろう？何をためらっているのだ？」

そう言いながら俺の方に迫ってくる灯。俺の方が背が高いはずなのに、思わず後退りしてしまう。なんだろう…別に悪い事してた訳じゃないのに、こんな気分になるなんて。

さらにその時、

「あらこんなにちは、二人共、今日は早いんですね」

「私、来たよ」

香織と沙良が、扉を開けて部屋に入ってきた。

「……………」

「……あの…どうしたんですか？」

固まってしまっただけ動かない俺を疑問に思ったのか、香織が口を開いた。

「なに、龍夜君がおかしな病気を発病したそうなのでな。病院に行っただけと提案していたのだ」

「俺は至って健全だっ！」

「そうか。ならばさっきまでやっていた事はなんだ？説明しろっ！」

「さっきまでやっていた事…とは？」

あ…香織が何か聞いたような目で俺を見ている？それに沙良も俺をじーっと見ているし、灯は俺を睨み続けている。

「俺は悪い事はやって無い！」

その場の空気に耐えられなくなって、俺はつい声を上げた。だが、その言動は…

「まるで言い訳し始めた子供の様だな」

「……本当に悪い事はしていなかったな。だが…それならどうして正直に言わなかったのか……」

机に手を着き、ハアと溜息をつく灯。俺はどうしていいのか、椅子に座っている。

「言えば良い事をあんなに渋ってましたからね…誤解しますよ。」
香織も呆れている。

「でも、凄く良いよ」

そんな中、沙良だけが、まとめられた原案を持って微笑んでいた。

これが、俺の説明を聞いた後のそれぞれの反応である。二人は完全な呆れて、一人は優しく褒めてくれた。

「確かに、原案をまとめて一つの物語にするという考えは良かったな。そこは及第点だ」

頭を上げて、髪を整えながら灯が言った。

「だが、龍夜君が一人で組立てた物では不安だなあ」

……ひっでえ。俺が選んだんじゃない駄目なのかよ。一方灯は、部室を謎解きをする探偵の様に歩き回りながらこう言った。

「ま、我は原案の中から良い物を選んで膨らましていこうと考えていたが、原案をまとめて、良い物語に良い設定を組み込める龍夜君の考えが気に入った。皆、まずは、原案の種類分けをしよう。まずは、

キャラクターについて書かれた物。

舞台について書かれた物。

物について書かれた物。

そして、物語の始まり方。僅かな掛け合いが書かれた物に分ける。
そこから段々と作る事でしょう」

其の者、相談者なり。 6ページ

そこから、俺達は原案の仕分け作業に入っていた。まず、俺の目の前には、物の設定について書かれた物が積まれ、沙良の目の前には、舞台について書かれた物が積まれ、香織の前には、人物について書かれた物が積まれている。そして、空いている所には、まだ仕分けていない物と、物語の始まり方、僅かな掛け合いが書かれた物が積まれている。

灯は、舞台について書かれた物の中から一つ、原案を選んでいく。人物や物の設定は後から組み込み易いが、舞台の設定は後からどうこう出来ないかららしい。どんな物語になるかは知らないが、ここは部長に任せておこう。

「んゝなあ、この‘神代’についてのセリフが書かれたやつって、掛け合いに含まれるのか？それとも、舞台の設定に含まれるのか？」俺は手にとっていた紙をひらひらさせて、周りに問いかけた。

「む、セリフだけで書かれているのなら、掛け合いではないか？」まず反応したのは、紙を両手に持って、一人立ち上がっている灯だった。

「その、神代、が、どれ位重要に書かれているかにもよりまずけど……」

「舞台」

香織の話を遮って、沙良が言った。

「えっ？」

「掛け合い、どこでも出来る、雑談」

真面目な顔で俺達を見回す沙良。その言葉に灯はふむ、と頷いた。

「まあ確かに、そうだよな」

俺も同意して、舞台の設定の山に紙を重ねた。

その後、しばらくして、俺達は原案の山を整理し終わった。

ふうー。と一息ついてから、俺は灯に問いかける。

「どうだ灯。物語の舞台は決まったか？」

灯は、紙を見比べながら言った。

「それがな、良い設定がいくつかあって、決めかねているのだ。この場合、どうしたら良いと思う？」

「あー取り敢えず、俺等にも、見せてくれ」

灯は机の空いているスペースに、三枚の紙を出す。俺、香織、沙良は、覗き込む様にそれを見た。

「成る程、どれも細かく設定が書かれていますね」

「多分、全部同じ奴が書いたんだろう……」

「どれも良い」

そう。沙良が言った様に、この原案。どれも良い設定が書かれてるんだよ。さて、どうしたものか。

「ねえ」

短い声を上げて、沙良が身を乗り出した。

「何か……良い案があるのですか？」

「人物、移動、切り替え、舞台」

沙良は、短い単語を四つ発した。俺は、言葉の意味を考えて……

「「そうかつ！」」

理解した瞬間。声を上げた。俺と同時に声を上げたのは灯だ。

「登場人物を移動させれば、舞台が幾つかあってもおかしくない」

「それぞれのカットを構成出来るし、場面ごとに分けて作っていく事も可能だ。凄いぞ紗良」

「紗良さん、良く気づきましたね」

「凄いな。紗良」

「！……………」

三人から次々褒められて驚いたのか、紗良は両手をパタパタさせた。文芸部の物語創作活動三日目は、こうして過ぎていった。

其の者、相談者なり 7ページ

うーむ、この英語と言う教科、かなり難しい。教科書を見ても、何
が書いてあるのか分からない。唯々アルファベットが並んでいるだ
けにしか感じない。もしかしたら、これは教科なんて物ではなく、
先生が考えた嫌がらせの為だけの授業なのかもしれないな。

「お前：英語が苦手なのはわかるけどよ……そこまで言う事無いん
じゃないか？」

愚痴が漏れていたのか、誠人の呆れた口調が後ろからきこえる。

「でもよ？なんでこの俺が良い点数を取れない教科があるのかって
話だ」

「『この俺が』って、さりげなく自慢しているみたいに聞こえるぞ。

……まあ、お前英語が苦手なのはわかるよ。だってお前英語のテス
ト、赤点越えて青点踊レッドゾーン ブルーゾーンってるんだからよ」

「まったく、理系頭の俺には理解できん領域だ」

俺はそう言って腕を組む。その俺の言動に、誠人は苦笑しながら

「そこまで言うか、ならどうして文芸部に入ったんだ？」

と聞いて来た。教室では、今日最後の授業が終了した事を意味する
チャイムが鳴っている。

おれは、前を向いたまま一言。

「知らん」

俺が文芸部に入ったのは、人数欲しさに灯が強制的に入れたんだと、

俺は思っている。まあ、活動は楽しいし、辞める気はないが。

放課後。部室へと向かう途中、俺は少し回想をしていた。

それにしても、灯はよくあの文章で自分の事を天才小説家って言ってたな。……あの文章は、色々はしょってるから分らないけど、もしかしたらあいつの頭の中は、ワンダーランドになってるのかもしれない。となればあいつは表現の仕方を知らないだけで、名作と呼べるような作品を頭の中に持つてるのかもしれないな。

そんな事を考えながら階段を下っていると、不意に後ろから声をかけられた。

「あれ？君は確かぶんげー部にいた……」

おかしいな。文芸部はまだ正式じゃないし、人から声をかけられる程目立った活動もしていない。誰だろうと思って振り返ると、

「あ！やっぱり、ぶんげー部に居た人だね！」

山中さんが、階段の上段から俺を見下ろしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9079x/>

私の小説は偉大なり

2012年1月12日18時58分発行